『萬葉集』柿本人麻呂「吉野讃歌」における漢籍の受容
―南朝宋の鮑照「侍宴覆舟山二首」との比較を通して―

内田夫美

一　はじめに

『萬葉集』巻一、雑歌の部には「幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麻呂作歌」という題詞を持つ歌群がある。それは第一歌群と第二歌群にて構成され、次のようである（以下、「吉野讃歌」とする）[1]。

幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麻呂作歌

八隅知之　吾大王之　所聞食　天下尓　國者思毛　澤二雖有
山川之　清河内跡　御心乎　吉野乃國之　花散相　秋津乃野
邊尓　宮柱　太敷座波　百磯城乃　大宮人者　船並弖　旦川渡
舟競　夕河渡　此川乃　絶事奈久　此山乃　弥高思良珠　水
激　瀧之宮子波　見礼跡不飽可問　（巻一―三六）

反歌

雖見飽奴　吉野乃河之　常滑乃　絶事無久　復還見牟
（巻一―三七）

安見知之　吾大王　神長柄　神佐備世須登　芳野川　多藝津河内
尓　高殿乎　高知座而　上立　國見乎為勢婆　疊有　青垣山　山
神乃　奉御調等　春部者　花挿頭持　秋立者　黄葉頭刺理　一云
黄　葉加射之　逝副　川之神母　大御食尓　仕奉等　上瀬尓　鵜
川乎立　下瀬尓　小網刺渡　山川母　依弓奉流　神乃御代鴨
（巻一―三八）

反歌

山川毛　因而奉流　神長柄　多藝津河内尓　船出為加母
（巻一―三九）

右、日本紀曰、三年己丑正月、天皇幸二吉野宮一。八月、幸二吉野宮一。四年庚寅二月、幸二吉野宮一。五月、幸二吉野宮一。五年辛卯正月、幸二吉野宮一。四月、幸二吉野宮一者。未三詳知二何月従駕作歌一。

作者の人麻呂は、持統・文武朝に活躍した歌人とされ[2]、それは『懐風藻』序に[3]、

及二至淡海先帝之受一レ命也、恢二開帝業一、弘二闡皇猷一。道格二乾坤一、功光二宇宙一。既而以爲、調レ風化レ俗、莫レ尚二於文一、潤レ徳光レ身、孰先二於學一。

等ある記載によって漢詩文隆盛の始まりとされる天智天皇の近江朝からそう遠くない、漢籍より影響を受け始めた中でも初期の頃と推定さ

れる[4]。「吉野讃歌」の漢籍受容は、契沖の『萬葉代匠記』（初稿本）が[5]、

文選班固東都賦曰。山靈護レ野屬御方神。雨師汎灑風伯清レ塵。同寶鼎詩曰。嶽脩レ貢兮川效レ珍。揚雄甘泉賦曰。八神奔而警蹕兮、振殷轔而軍裝、蚩尤之倫帶二干將一而秉レ玉戚兮。顔延年詩、山祇蹕二嶠路一、水若警二滄流一。

と用例を挙げて指摘する。その中にある「顔延年詩　山祇蹕二嶠路一　水若警二滄流一」について、最初に詳しい考察を加えられたのは上野理氏である[6]。上野理氏は、「顔延年は、一首の詩に、巡狩に際して山川の神々が道中を守護し、多数の侍臣が供奉したことと、天子の徳礼が人民や魚鳥にもあまねくゆきわたり、山川の神々を懐柔するにいたったといい、帝徳を讃美する。人事と自然の二面から帝徳を讃美し、しかも、人事は供奉者の多さで、自然は山川の神々が服従していることで表現する構成方法は、『吉野讃歌』に共通しており、この類似は全くの偶然と考えることはできない。」と述べられる。だが、漢籍において天子に山祇水若が奉仕するという表現は[7]、

○『初學記』巻第十三、巡狩第七　侍二遊方山一應詔詩（梁）沈約

清漢夜昭晳　扶桑曉陸離　發レ歌擬陽下　巡レ羽朝夕池　擬金浮二水若一　聳罩映二山祇一　一霑九霄露　藜藿終自知

○『廣弘明集』巻第三十下　從駕經二大慈照寺一詩（北齊）盧思道

玄風冠二東戸一　内範軼二西陵一　大川開二寶匣一　福地下二金繩一　繡栭高可レ映　畫栱疊相承　日馭非レ難レ假　雲師本二易憑一　陽室疑二停燧一　陰軒類二鑒冰一　迴題飛二星沒一　長楣宿二露凝一　旌門曙光轉　輦道夕雲蒸　山祇效二靈物一　水若薦二休徵一　虛薄叨二恩紀一　微軀竊二自陵一　優游徒可レ恃　周賚永難レ勝

等、他にも見られる。そのような表現は漢籍に広くあったとみるべきではないか。顔延年詩よりの影響を否定するのではない。身崎壽氏が「ここではいわゆる出典論の厳密な方法によることなく、もっぱら詩賦における帝王讃美の表現の万葉宮廷儀礼歌への影響ということをかんがえておきたい。」と述べられるように[8]、「吉野讃歌」における漢籍の受容は、顔延年詩をも含め、漢籍における帝王讃美の表現が広く取り入れられたと考えるべきであろう。また、上野理氏は、顔延年が選んだ自然・人事二面からの帝徳讃美の光景を二分して「吉野讃歌」二歌群が作歌されたのだろうと推測されるが、漢籍には、元来、二首で構成される詩がある。そのような二首構成の詩に倣い、「吉野讃歌」二歌群の構成が成立したという蓋然性はないのであろうか。

以下、漢籍にある二首構成の詩と「吉野讃歌」との共通性や類似性を探り、「吉野讃歌」二歌群の構成が漢籍より受容された蓋然性を追究していく。

二―一　漢籍にある鮑照の侍宴詩二首

漢籍における二首構成の詩は、例えば『文選』にも魏の曹植「送二應氏一詩二首」（巻第二十）等、掲載される[9]。しかし、「吉野讃歌」は、題詞や左注にあるように、天皇の吉野行幸の際の従駕歌である。その性格上、漢籍における二首構成の詩を探究する場合も、従駕詩や

應詔詩、侍宴詩等に注目するべきであろう。そのような観点で漢籍における二首構成の詩を探ると、次に挙げる鮑照の「侍宴覆舟山二首」が見出される。詩題より分かるように、これは侍宴詩であり、天子賞讃の機能を持つものである[10]。

侍宴覆舟山二首　　勅為二柳元景一作

息レ雨清二上郊一　開レ雲照二中縣一　遊レ軒越二丹居一　暉レ燭集二涼殿一　凌レ高躋二飛楹一　追レ焱起二流宴一　拯苑含靈羣　嵒庭藏物變　明暉爍二神都一　麗氣冠二華甸一　目遠幽情周　醴洽深恩遍

繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一　清蹕戒二馳路一　羽蓋佇二宣遊一　神居既崇盛　嵒嶮信環周　禮俗陶二德聲一　昌會溢二民謳一

慙下無二勝レ化質一　謬從中雲雨浮上　（『鮑氏集』巻第八）

鮑照の集は、藤原佐世撰『日本國見在書目録』に「鮑集十」とあり[11]、上代における伝来も推測されている[12]。

二―二　覆舟山と吉野の地との共通性

覆舟山[13]を詩題とする用例は、『藝文類聚』において三箇所に見られる。それらは以下の通りである[14]。

○宋孝武遊二覆舟山一詩曰、束髮好怡衍　弱冠頗流薄　素想終勿レ傾　聿來果二丘壑一　曾峯亘二天維一　曠渚綿二地絡一　逢三皐列二神苑一　遭三靖樹二仙閣一　松墳含二青暉一　荷源煜二彤爍一　川界泳二遊鱗一　巖庭響二鳴鶴一　（巻第七、山部上、惣載山）

○梁劉孝威登二覆舟山一望二湖北一詩曰、紫川通二太液一　丹岑聯二少華一　堂皇更隱映　松灌雜交加　荇浦浮二新葉一　漁舟繞二落花一　浴童爭二淺岸一　漂女擇二平沙一　極レ望傷二春目一　迴レ車歸二狹邪一　（巻第二十八、人部、遊覽）

○宋鮑昭侍二宴覆舟山一應詔詩曰、繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一　清蹕式二馳路一　羽蓋竚二宣遊一　神居既崇盛　巖險信周流　禮俗陶二德聲一　昌會溢二民謳一　（巻第三十九、禮部中、燕會）

第一詩は鮑照が仕えた天子、孝武帝の作である。「遊二覆舟山一」と詩題に「遊」とあることから、その地が遊宴の地であったと分かる[15]。その地にて君臣和楽の祝宴が開かれたのであろう。第二詩は、梁の劉孝威の作である。「遊覽」の部に掲載されるように、やはり覆舟山が遊宴の地であったと思わせる。第三詩は、應詔詩とされ、多少語句に差異はあるが、鮑照侍宴詩の第二詩であり、第二詩のみが掲載される為、二詩は独立性があると言える。第二詩がここに掲載されるのは「燕會」という項目に適う為であろうか。

覆舟山の特色は、『宋書』よりも窺える。『宋書』に[16]、

北郊、晉成帝世始立、本在二覆舟山南一。宋太祖以二其地一為二樂游苑一、移二於山西北一。後以二其地一為二北湖一、移二於湖塘西北一。其地卑下泥濕、又移二於白石村東一。其地又以為レ湖、乃移二於鐘山北京道西一、與二南郊一相對。後罷二白石東湖一、北郊還二舊處一。　（巻十四、志第四、禮一）

とある。ここに見える北郊は祭祀の場であり、それが覆舟山の南にあったところから覆舟山は祭祀に関わる遊宴の地と推測される[17]。

対する吉野は、『懐風藻』掲載の吉野詩等からその地の持つ特性が

推察される。『懐風藻』にある十七首の吉野の詩を作者と詩題のみあげると、

葛野王　五言　遊二龍門山一　一首
贈正一位太政大臣藤原朝臣史　五言　遊二吉野一　二首
従四位下左中辨兼神祇伯中臣朝臣人足　五言　遊二吉野宮一　二首
大宰大貳正四位下紀朝臣男人　七言　遊二吉野川一　一首
正三位式部卿藤原朝臣宇合　五言　遊二吉野川一　一首
従三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣萬里　五言　遊二吉野川一　一首
従三位中納言丹墀眞人廣成　五言　遊二吉野山一　一首

と「遊」という詩題を持つ詩があり、吉野（龍門山は吉野にある山名）が覆舟山と同じく遊宴の地であったと推測させる。また、

大伴王　五言　従二駕吉野宮一　應詔　二首
大宰大貳正四位下紀朝臣男人　五言　扈二従吉野宮一　一首
正五位下圖書頭吉田連宜　五言　従二駕吉野宮一　一首
従五位下陰陽頭兼皇后宮亮大津連首　五言　和下藤原大政遊二吉野川一之作上　一首
従三位中納言丹墀眞人廣成　七言　吉野之作　一首
従五位下鑄錢長官高向朝臣諸足　五言　従二駕吉野宮一　一首
正五位下中務少輔葛井連廣成　五言　奉レ和二藤太政佳野之作一　一首

と「應詔」や「従駕」によって詠まれた詩や「遊」と題された詩に和す（答える）詩などがあり、吉野が天皇に従駕し、勅命を受けて作詩される場であったと分かる。その中の二首構成の詩を挙げると、

31　藤原朝臣史　五言　遊二吉野一　二首
飛レ文山水地　命レ爵薛蘿中　漆姫控レ鶴擧　柘媛接レ魚通　煙光巖上翠　日影濟前紅　翻知玄圃近　對翫入レ松風
32夏身夏色古　秋津秋氣新　昔者聞汾后　今之見吉賓　靈仙駕レ鶴去　星客乗レ査逡　諸性担二流水一　素心開二静仁一
45　中臣朝臣人足　五言　遊二吉野宮一　二首
惟山且惟水　能智亦能仁　萬代無レ埃所　一朝逢レ柘民　風波轉入レ曲　魚鳥共成レ倫　此地即方丈　誰説桃源賓
46仁山狎二鳳閣一　智水啓二龍樓一　花鳥堪二沈翫一　何人不二淹留一
47　大伴王　五言　従二駕吉野宮一　應詔　二首
欲レ尋二張騫跡一　幸逐河源風　朝雲指二南北一　夕霧正二西東一
嶺峻絲響急　谿曠竹鳴融　將レ歌二造化趣一　握レ素愧二不工一
48山幽仁趣遠　川淨智懐深　欲レ訪二神仙迹一　追從吉野潯

となる。各詩中に吉野を仙境と見る表現があり、吉野の地も祭祀に関わる遊宴の地であったと理解される。『日本書紀』には[18]、

辛未、天皇幸二吉野宮一。甲戌、天皇至レ自二吉野宮一。（巻第三十、持統天皇、三年正月）
甲申、天皇幸二吉野宮一。（巻第三十、持統天皇、三年八月）
甲子、天皇幸二吉野宮一。（巻第三十、持統天皇、四年二月）

等、持統天皇の在位中、三十一回の吉野行幸が記され、そのような中、

四年春正月戊寅朔、…（中略）…皇后即天皇位。（巻第三十、持統天皇、四年正月）

と天皇は持統四年正月に称制を終えて正式に即位する。

このように覆舟山も吉野の地も共に「遊」と題される詩が詠まれ、天子や天皇が行幸される、祭祀に関わる遊宴の地という共通性がある。

二―三　鮑照の第一詩について

【第一詩】

息レ雨清二上郊一　開レ雲照二中縣一　遊レ軒越二丹居一　暉レ燭集二涼殿一　凌レ高躋二飛楹一　追レ焱起二流宴一　拯苑含靈羣　嵩庭藏物變　明暉爍二神都一　麗氣冠二華甸一　目遠幽情周　醴洽深恩遍

鮑照の第一詩にある「上郊」について、『史記』に、

其明年、上郊レ雍、通二回中道一、巡レ之。春、至二鳴澤一、從二西河一歸。（巻十二、孝武帝本紀第十二）

其明年、上郊レ雍、通二回中道一、巡レ之。春、至二鳴澤一、從二西河一歸。（巻二十八、封禪書第六）

とあり、『漢書』に、

十六年夏四月、上郊二祀五帝于渭陽一。（巻四、文帝紀第四）

明年、上郊二雍五畤一、通二回中道一、遂北出二蕭關一、歴二獨鹿、鳴澤一、自二西河一歸、幸二河東一祠二后土一。（巻二十五下、郊祀志第五下）

後間歲正月、上郊二泰畤一、因朝二單于於甘泉宮一。（巻二十五下、郊祀志第五下）

とある。これらの用例より、「上」とは天子を指し、「上郊」とは天子の祭祀と捉えられる。鮑照第一詩の冒頭は、まず「息レ雨清二上郊一」と、雨やんで上郊は清らかであり、次に「開レ雲照二中縣一」と、雲を開いて中縣を照らすと詠む。これらはその場の状況を表し、同時に、その中に天子や天子の統治する地を讃美する意が含蓄されている[19]。

続く「遊レ軒越二丹居一」の「軒」とは『説文解字』に[20]「軒、曲輈藩車也」（十四篇上、車部）とあるように、曲がった長柄の、覆いのある車の意で、「遊」とあるので、その車に乗って「丹居」を後にして巡り楽しむということであろう[21]。そのような活動ができるのは明るい時であり、これは朝（或いは昼）の臣下の様子を詠んだものと捉えられる。対する「暉レ燭集二涼殿一」の「燭」は火を言い、その火が「暉」（かがやく）中で「集」（つどう）とは、暗くなり、夕（或いは夜）に集まって楽しむ臣下の姿を詠んでいるのであろう。「涼殿」は、『樂府詩集』に[22]、

赫赫盛陽月　無レ儂不レ握レ扇　窈窕瑤臺女　冶遊戲二涼殿一

（巻四十四、「子夜四時歌七十五首」晉宋齊辞、夏歌二十首、第十六首）

とあり、これは夏の詩である。だが、『文選』には、

星火既夕　忽焉素秋　涼風振レ落　熠燿宵流

（巻第十九、晉、張華「勵レ志一首」）

と「涼風」があり、『禮記』に[23]、

孟秋之月、日在レ翼。昏建星中、旦畢中。…（中略）…涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭レ鳥、用始行レ戮。（巻第六、月令第六）

と「孟秋之月…涼風至」とあって、「涼風」は秋風を意味する。また、

『晉書』には、

二序啟矣、而五時之坐開、四隅陳設、而一御之位建。溫宮膠葛、涼殿崢嶸、絡以二隋珠一、綷以二金鏡一、雖三曦望互升二於表一、而中無二晝夜之殊一、陰陽迭更二於外一、而内無二寒暑之別一。

（巻一百三十、載記第三十、赫連勃勃）

と「涼殿」が「温宮」と対比的に用いられる。「温」と「涼」とは、『文選』収載の鮑照の詩「東武吟」にも、

密塗亘二萬里一　寧歲猶七奔　肌力盡二鞍甲一　心思歷二涼溫一

（巻第二十八、南朝宋、鮑照「樂府八首」第一首）

とあり、この「涼温」は寒暖を表し、秋と春のこととされる。「涼温」が秋と春とを指すことは、『春秋左傳正義』の、

六氣曰二陰、陽、風、雨、晦、明一也、分為二四時一、序為二五節一…（中略）…正義曰、六氣並行、無二時止息一、但氣有二溫、暑、涼、寒一、分為二四時一、春、夏、秋、冬也。（巻第四十一、昭公）

という解釈からも明らかである。本来、「涼」は秋を指し、「寒」ほどではない、緩やかな「寒さ」を言うと理解される。一方、「涼殿」は夏の詩の中にも用いられる[24]。故に、「涼殿」とは、季節に拘わらず、涼しい建物の意と捉えたい。すなわち、鮑照第一詩のこの部分には、朝（昼）と夕（夜）の天子に奉仕する臣下の姿が詠まれている。

次に、「飛楹」について、「飛」が建物に冠せられる例は、『文選』に、

排二飛闥一而上出、若レ遊二目於天表一、似二無レ依而洋洋一。

（巻第一、後漢、班固「西都賦」）

其内則含德章臺、天祿宣明、溫飭迎春、壽安永寧。飛閣神行、莫二我能形一。（李善注）言閣道相通、不レ在二於地一、故曰レ飛。

（巻第三、後漢、張衡「東京賦」）

と高所にある意で用いられる。「楹」は同じく『文選』に、

雕二玉瑱一以居レ楹、裁二金璧一以飾レ璫。（李善注）言彫二刻玉礩一、以居二楹柱一也。…（中略）…說文曰、楹、柱也。

（巻第一、後漢、班固「西都賦」）

とあり、李善注が述べるように、『說文解字』に「楹、柱也」（六篇上、木部）とある。「飛楹」とは高いところにある柱を言おう。

続く、「焱」は「ほのお」のことで、「焱」を（目で）追いつつ「流宴」を始めるのである[25]。その盛んな宴会の周辺で、「玄苑」（駒よけで囲まれた苑）には「含靈」が群れとなり、「嵓庭」（岩のある庭）には「藏物」が移り変わる[26]。「明暉」（明るい輝き）が「神都」を光らせ、「麗氣」（麗しい気配）が「華甸」に立ちこめる[27]。

「幽情」は、『文選』に、

丘去レ魯而顧歎、季過レ沛而涕零。伊故鄉之可レ懷、疚二聖達之幽情一。矧匹夫之安レ土、邈投二身於鎬京一。

（巻第十、晉、潘岳「西征賦」）

と聖人・達人の深い心を指して詠む例があり、この鮑照第一詩でも天子の深い御心を指そう。その天子の深い御心は、「目遠」、「周（あまねし）」と、遠く至る所にまで行き届くと詠まれる。「深恩」も、『後漢書』に、

遠夷慕レ德歌詩曰、…（中略）…聖德深恩　與二人富厚一　冬多二霜雪一　夏多二和雨一　寒溫時適　部人多有　涉レ危歷レ險不レ遠二萬里一　去レ俗歸レ德　心歸二慈母一

（巻八十六、南蠻西南夷傳第七十六、西南夷）

と天子の徳をいう場面に現れ、鮑照第一詩においても天子の深い恩徳を指すであろう。「醴洽（うるほひ）」と酒が溢れる様が詠まれ[28]、これは宴会の様子を表す近景であり、その中で天子の深い恩徳はすべてに行き渡ると、宴会の様子を述べつつ、天子を賞讃する。

二―四　鮑照の第二詩について

【第二詩】

繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一　清蹕戒二馳路一　羽蓋佇二宣遊一　神居既崇盛　嵩嶮信環周　禮俗陶二德聲一　昌會溢二民謳一　慙下無二勝レ化質一　謬從中雲雨浮上

鮑照第二詩の冒頭は、「繁霜飛二玉闥一」と激しい霜の舞う景から歌い出され、突然具体的な景から始まるために、これを単独の詩と考えると唐突の感がある。これは第一詩を承けての表現ではなかろうか。第一詩の最後には、「幽情周」、「深恩遍」と天子の深い恩徳が遠近にあまねく行き渡ると詠まれ、その表現を承けて第二詩の冒頭は景に託して天子を賞讃するのではないか。

「繁霜」については、『毛詩』小雅、節南山、「正月」の詩に、

正月繁霜　我心憂傷　民之訛言　亦孔之將　念我獨兮　憂心京京
哀我小心　瘨憂以痒

と「正月繁霜」とあり、毛傳は「正月、夏之四月。繁、多也」、鄭箋は「夏之四月、建巳之月、純陽用レ事而霜多、急恒寒若之異、傷二害萬物一、故心為レ之憂傷。」と述べる。つまり、「正月」とは夏の四月で、そのような季節外れに降る多くの霜は萬物に障害を齎し、その為、心が憂い傷むというのである。『毛詩正義』は「時大夫賢者、覩二天災一以傷二政教一、故言正陽之月而有二繁多之霜一、是由二王急酷之異一、…（中略）…故我心為レ之憂傷也。」（巻第十二）と、これを政治の乱れを比喩する故の歎きと解釈する。そして、その表現は『漢書』や『後漢書』に次のように引用される。

○『漢書』

霜降失レ節、不レ以二其時一、其詩曰、正月繁霜、我心憂傷、民之訛言、亦孔之將。言民以レ是為レ非、甚衆大也。此皆不和、賢不肖易位之所レ致也。

（巻三十六、楚元王傳第六）

○『後漢書』

今年正月繁霜、自レ爾以來、率多二寒日一、此亦急咎之罰。天於二賢聖之君一、猶三慈父之於二孝子一也。丁寧申戒、欲二其反一レ政、故災變仍見、此乃國之福也。

（巻三十六、鄭范陳賈張列傳第二十六、鄭興）

これらも時期に適わぬ繁霜を政治の乱れの現れとする。だが、三例の中でより時代の新しい『後漢書』には、「故災變仍見、此乃國之福也」と、（政を正す為に）災変が現れるのは国にとって幸いであるという肯定的な見方も示される。また、『宋書』は、「繁霜」について[29]、

碣石　步出夏門行　武帝詞（第二解）

孟冬十月　北風裴回　天氣肅清　繁霜霏霏　鵾雞晨鳴　鴻雁南飛
鷙鳥潛藏　熊罷窟棲　錢鎛停置　農收二積場一　逆旅整設　以通二

賈商一　幸甚至哉　歌以詠レ志　冬十月

（巻二十一、志第十一、樂三）

と魏の武帝曹操の詞の中の言葉として「孟冬十月…（中略）…繁霜霏霏」と詠み、それは「幸甚至哉　歌以詠レ志」と結ばれる。時期に適って激しく降る霜は幸運の証であり、また、曹操の心の象徴でもあって、戦いに勝利した後の、激しく奮い立つ曹操の心を景に託して表現していよう。さらに、『隋書』には、隋の煬帝の言葉として、

下レ詔曰、天地大徳、降二繁霜於秋令一、聖哲至仁、著二甲兵於刑典一。故知造化之有二肅殺一、義在レ無レ私。帝王之用二干戈一、蓋非レ獲レ已。

（巻四、帝紀第四、煬帝下）

と天地の大いなる徳は秋に多くの霜を降らすとある。つまり、「繁霜」が政治に対して用いられる場合、典拠となる『毛詩』においては為政者を批判するものであるけれども、時代が移るにつれて、時期に適う「繁霜」は帝徳を賞讃するものとして用いられるようになっていく。鮑照詩は魏の武帝詞と隋の煬帝の言葉との間にあたる時代の制作と考えられ、その「繁霜」の表現も、景を詠みつつ、帝徳を賞讃するものとして機能しているのではなかろうか。「愛景」は穏やかな光と捉えられ[30]、「皇州」とは天子の都を指そう。穏やかな光が「皇州」に「麗」（美しく輝く）と詠むのも天子の帝徳を讃えるものであろう[31]。この「愛景」を春の景とは考えられないだろうか。「愛景」は「曖景」であり[32]、『文選』にある「曖」について、

曖有二餘暉一、遙然留レ想。（李善注）曖、溫貌。莊子曰、曖然似レ春、遙然流レ想、所レ慮者深矣。

（巻第五十八、南齊、王儉「褚淵碑文」一首）

と、李善注が莊子を引いて「似レ春」（春に似たり）と解する故に、「愛景」は春の景と言えるのではないか。そして、「繁霜」と対になり、「繁霜～愛景～」と対比させて、秋から春という季節の推移を表し、その中に天子の威徳を含蓄する表現として成立するのではないか。そうすれば、ここに「秋～春～」という季節の推移を表しつつ、帝徳賞讃の意を包含する詩句があることになる。

続く「清蹕」は、『文選』に、

帝暉膺二順動一　清蹕巡二廣塵一（李善注）…漢儀注曰、皇帝輦動、出則傳レ蹕、止レ人清レ道。

（巻第二十二、南朝宋、顔延之「應詔觀二北湖田收一一首」）

とあるように、天子の行く道を清める先払いである。先述の契沖等の挙げる『文選』の顔延年（延之）の詩にも、

山祇蹕二嶠路一　水若警二滄流一（李善注）山祇、山神也。

（巻第二十二、南朝宋、顔延之「車駕幸二京口一三月三日侍二遊曲阿後湖一作一首）

と、山祇が天子の先払いとして描かれている。「馳路」は天子の行く道で[33]、「清蹕戒二馳路一」とは、「清蹕」が天子の行く道の先に立ち、清めるという意である。その為、「羽蓋」は『文選』に、

羽蓋威蕤　葩瑾曲莖（李善注）羽蓋、以二翠羽一覆レ車蓋也。

（巻第三、後漢、張衡「東京賦」）

とあるより、翡翠の羽で作った車覆いと解されるが、鮑照第二詩の場合、その車に乗るのは「清蹕」によって導かれる天子以外に考えられ

ない。「宣遊」は、『文選』にも、

春江壯二風濤一　蘭野茂二稊英一　宣遊弘二下濟一　窮レ遠凝二聖情一

（巻第二十二、南朝宋、顔延之「車駕幸二京口一侍二遊蒜山一作一首」）

と天子の行幸をいう際に用いられている。従って、「羽蓋佇二宣遊一」とは、天子が「羽蓋」のある車に乗って巡り、しばらく佇む意と捉えられる[34]。この天子の巡る姿は、第一詩の「遊レ軒越二丹居一」と対応するであろう。対応しつつ、第一詩と大きく異なるのは、第二詩が天子の姿を描いている点である。

その「神居」は既に尊く盛んな様子で、「嵒嶮」がしっかりと周囲を取り囲む[35]。そのような険固な地に守られ、「禮俗陶二德聲一　昌會溢二民謳一」と、「禮俗」（人々の集まり）は天子の徳をよろこび[36]、「昌會」（盛会）は、「民謳」（人々の斉歌）に溢れるのである[37]。

第一詩と第二詩とを比較すると、冒頭は第一詩に「息レ雨清二上郊一　開レ雲照二中縣一」とあり、第二詩に「繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一」とあって、共に天子を賞讃し、対応する機能を持とう。一方で、やはり第二詩の冒頭は、第一詩の末尾を承けていよう。第一詩末の「神都」と第二詩初めの「皇州」とは共に帝都を言い、また第一詩末の「麗氣冠二華甸一」の「麗」の文字表現は、第二詩初めに「愛景麗二皇州一」と現れ、共に都の美しい気配を述べて、第一詩と第二詩とを繋いでいよう。さらに第二詩では天子の姿が詠まれ、これは、第一詩が臣下の姿を詠むのに対応しつつ、侍宴詩においては核心に迫るものであり、第一詩が天子の徳を讃えて遠近に及ぶ様を詠み終了するのに対し、第二詩ではその徳を承け讃える人々を登場させ、「禮俗」は天子の徳をよろこび、「昌會」は天子を讃える歌にあふれると描かれる等、第一詩を展開、発展させている。このように、『藝文類聚』に第二詩のみ単独にて掲載されることがあっても、二首構成の鮑照詩が対応と展開という構造を持つ連作の詩であることは間違いなく言えるであろう。

三　人麻呂「吉野讃歌」と鮑照詩との比較

まず、「吉野讃歌」の冒頭は、第一長歌に、

八隅知之　吾大王之　所聞食　天下尓　國者思毛　澤二雖有　山川之　清河内跡　御心乎　吉野乃國之　花散相　秋津乃野邊尓

第二長歌に、

安見知之　吾大王　神長柄　神佐備世須登　芳野川　多藝津河内尓

とある。共に「やすみしし」で始まり[38]、場所を提示するこの冒頭が天皇賞讃の意を持ち対応することは明らかであり、第二長歌の冒頭が簡潔なのは、第一長歌を踏まえている為である[39]。一方、第一長歌末尾の表現が第二長歌冒頭の「芳野川　多藝津河内尓　高殿乎　高知座而」以下に対応、接続して以下の叙述が導かれていくという展開の関係もある[40]。先述したように、鮑照詩の冒頭も、

息レ雨清二上郊一　開レ雲照二中縣一　（第一詩）

繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一　（第二詩）

と、共に天子を賞讃するという対応が見られ、一方、第二詩は、冒頭に第一詩の末尾にある天子の御心のあまねく行き渡ることを踏まえ、それを承けて、天子賞讃を景に託して表現し、さらに天子の姿を描く

等、その叙述を展開させていく。このように、「吉野讃歌」二歌群にも、鮑照詩二首にも、対応と展開という構造が見られる。

次に、第一長歌と第一詩とを比較すると、「吉野讃歌」第一長歌に、「宮柱　太敷座波」という表現があり、「宮柱」という柱が歌われる。「太敷座波」とは「太くしっかりと立てた」という意であり、そのように歌うことによって、王権の偉大さ、強靱さが詠まれている[41]。一方、鮑照第一詩にも「凌レ高躋二飛楹一」とある。「飛楹」は高所にある柱であり、これも柱とその高さを示すことによって王権の崇高さ、偉大さを暗示しておろう。

また、「吉野讃歌」第一長歌は「百磯城乃　大宮人者　船並弖　旦川渡　舟競　夕河渡」と、「朝～夕～」の表現を用いて天皇に奉仕する大宮人の姿を描き、鮑照第一詩も「遊レ軒越二丹居一　暉レ燭集二涼殿一」と、「朝（昼）～夕（夜）～」に天子に奉仕する臣下の姿を描く。身崎壽氏がこの「吉野讃歌」の大宮人の姿に対して、

御心を　吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば という、天皇自身のものとしてえがかれる行動と呼応するかのように、対比的に配置されている…（中略）…いわゆる「君臣和楽」の構図が意図されているのではないだろうか。

と述べられる点にも注視したい[42]。鮑照詩にも臣下の姿を描く前に「上郊」があり、この「上郊」を天子の祭祀の姿と考えると、同じ構図があることになる。

さらに、第二長歌と第二詩とを比較すると、「吉野讃歌」第二長歌には「上立　國見乎為勢婆」と歌の前半部に登り立つ天皇の姿が描かれ、鮑照第二詩にも「羽蓋佇二宣遊一」と詩の前半部に車に乗って巡り、佇む天子の姿が描かれる。その描写も「上立」、「佇」（毛傳「佇立、久立也」）と、共に「立」と関わり表現されるという類似性がある。また、「吉野讃歌」第二長歌には、山神が天皇に奉仕する姿が「春部者　花挿頭持　秋立者　黄葉頭刺理」と、「春～秋～」の表現にて描かれ、鮑照第二詩にも「繁霜飛二玉闥一　愛景麗二皇州一」と、「秋～春～」の表現にて季節の推移が描かれ、そこに天子の威徳が含蓄される。その上、第二長歌には「山川母　依弖奉流」と、「山神・川之神」の天皇に奉仕する姿が、鮑照詩には「清蹕戒二馳路一」と、「清蹕」の天子に奉仕する姿が描かれるというように、共に天皇・天子に奉仕するものが詠まれている[43]。

四　鮑照詩の詠まれた時期

鮑照詩には詩題に続いて「勅為二柳元景一作」とあり、鮑照が柳元景に成り代わって侍宴詩を制作したと分かる。そして、その言葉が鮑照詩の詠まれた時期を推測させる。『宋書』柳元景傳に、

元景潛至二新亭一、依レ山建レ壘、東西據レ險。…（中略）…上至二新亭一即位、以二元景一為二侍中、領左衛將軍一。

（巻七十七、列傳第三十七）

とある。孝武帝政権は簒奪政権であり、孝武帝に味方した柳元景が前鋒として新亭に入って戦いに勝利し、孝武帝が新亭にて即位する。新亭とは当時の都であった建康の中にある駅亭である。その記事は『宋書』孝武帝紀にもあり、さらに孝武帝紀によると、その後、

孝建元年春正月己亥朔、車駕親祠二南郊一、改元、大赦天下。…（中略）…二月庚午、豫州刺史魯爽、車騎將軍江州刺史臧質、丞相荊州刺史南郡王義宣、兗州刺史徐遺寶舉レ兵反。（巻六、本紀第六）

とその翌年、孝武帝は南郊にて祭祀を行い、その後にまた反乱が起こって柳元景はその鎮圧のために建康を離れる。柳元景が建康郊外の覆舟山にて孝武帝の宴に参加できたのは、前鋒として新亭に至り、新亭にて帝が即位した後、反乱にて建康を離れる時までではなかろうか。「繁霜」の舞う中での詠とすれば、鮑照詩が詠まれたのは、孝武帝が即位した年の秋から冬の頃となり、或いは、翌年の春正月に孝武帝は南郊にて祭祀をしているので、「上郊」の語がその祭祀を指すと考えるならば、秋から春までの季節の推移を描いた上で、その祭祀の折の宴会にて詠まれたという可能性もあろう。『藝文類聚』掲載の孝武帝詩も同時期に詠まれたとも推測される。いずれにせよ、鮑照詩が孝武帝の即位に関わっての詠であることは間違いなかろう。

このように、鮑照の侍宴詩は新帝即位の時を背景とする詠詩の可能性があり、その点より鑑みると、「吉野讃歌」も持統天皇の即位に関わる詠と言え、持統天皇の即位が持統四年正月である為、当該詠は直後の二月の吉野行幸時と想定される。持統四年二月の詠という論は身﨑壽氏らにより既述であるが[44]、鮑照詩との比較においても、そのように考えるのが最も自然であろう[45]。

五　おわりに

以上、「吉野讃歌」と鮑照詩との共通性、類似性は、

○詠まれる場所に、天子や天皇の行幸される、祭祀などに関わる遊宴の地という共通性がある。

○共に対応と展開の構造が見られる。それ故、「吉野讃歌」第二長歌の冒頭は簡潔であり、鮑照第二詩の冒頭は唐突である。

○第一長歌、第一詩に、「宮柱　太敷座波」（「吉野讃歌」）、「凌レ高躋二飛楹一」（鮑照詩）とあり、共に「柱」を使って王権の強靱さ、崇高さを示す。

○第一長歌、第一詩に、「百磯城乃　大宮人者　船並弖　旦川渡　舟競　夕河渡」（「吉野讃歌」）、「遊レ軒越二丹居一　暉レ燭集二涼殿一」（鮑照詩）とあり、共に「朝（昼）～夕（夜）～」に奉仕する大宮人・臣下の姿を詠む。また、それ以前に天皇・天子の姿が描かれ、それらは呼応するかのようである。

○第二長歌、第二詩に、「上立　國見乎為勢婆」（「吉野讃歌」）、「羽蓋佇二宣遊一」（鮑照詩）とあり、共に歌や詩の前半部分にて天皇・天子の姿を描く。その描写も「上立」、「佇」と、共に「立」と関わり表現される。

○第二長歌、第二詩に、「春部者　花挿頭持　秋立者　黄葉頭刺理」（「吉野讃歌」）、「繁霜飛二玉闕一　愛景麗二皇州一」（鮑照詩）とあり、共に、「春（秋）～秋（春）～」という表現にて、「吉野讃歌」は天皇に奉仕する山神の姿を描き、鮑照詩は天子の帝徳を賞讃する。

○第二長歌、第二詩に、「山川母（やまかはも）　依弖（よりて）奉流（つかふる）」（「吉野讃歌」）、「清蹕戒二馳路一」（鮑照詩）と、共に天皇・天子に奉仕するものを描く。

とまとめられる。このように、「吉野讃歌」と鮑照詩とは、詠まれている個々の具体的な表現の共通性、類似性は脆弱であるが、それぞれの歌（詩）群にて大宮人（臣下）の姿、天皇（天子）の姿を詠むなどの内容や、構成における対応と展開という構造に、共通点や類似点が多々あり、殊に構成において、「吉野讃歌」が鮑照詩に倣って構想され作歌されたという蓋然性が高い。

また、鮑照の侍宴詩は新帝即位の時を背景として詠まれた可能性があり、その点より鑑みると、「吉野讃歌」も持統天皇の即位に関わっての詠ではないかと推測される。持統天皇の即位は持統四年正月であり、その為、当該詠は直後の二月の吉野行幸時とするのが最も自然であろう。

尚、他の漢籍における二首構成の詩、殊に鮑照詩以後、初唐までの詩を対象として、これらの二首構成の詩にも対応と展開という構造があるのか、日本における『懐風藻』などの二首構成の詩はどうか、これらを検討し、詩や歌の二首詠まれる意味をさらに明らかにしていくことを今後の課題としたい。

【注】

（1）本稿における『萬葉集』の引用は、訓読は『万葉集（一）～（五）』に、原文は『原文万葉集（上）、（下）』（共に、佐竹昭広氏、山田英雄氏、工藤力男氏、大谷雅夫氏、山崎福之氏校注、二〇一三年一月～二〇一五年三月、二〇一五年九月、二〇一六年二月、岩波書店）による。但、一部、私的に改めたところがある。

（2）『萬葉集』に収載される人麻呂作歌の中で、年次推定のできる最初が「日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌」（巻二－一六七～一六九）の持統三（六八九）年、最後が「明日香皇女木𨷂殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌」（巻二－一九六～一九八）の文武四（七〇〇）年である。

（3）以下、本稿における『懐風藻』の引用は、小島憲之氏校注『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粹』（日本古典文学大系69、一九六四年五月、岩波書店）による。但、一部、私的に改めたところがある。

（4）小島憲之氏「萬葉集と中國文学との交流」（『上代日本文学と中国文学』中、第五篇第五章、一九六四年三月、塙書房）、参照。

（5）『萬葉代匠記』の引用は、『契沖全集』第一巻（一九七三年一月、岩波書店）による。

（6）上野理氏「吉野讃歌―巡狩に歓呼し跳躍する自然―」（『人麻呂の作歌活動』V－第七章、二〇〇〇年三月、汲古書院、初出、「人麻呂の吉野賛歌の構想と表現―巡狩に歓呼し跳躍する自然―」の題にて、『国文学研究』七十四集、一九八一年六月）

（7）『初學記』の引用は、唐、徐堅等著『初學記』（一九六二年一月、中華書局）、『廣弘明集』の引用は、唐、釈道宣撰『廣弘明集』（四部叢刊初編子部、一九六五年、台湾商務印書館）による。

（8）身崎壽氏「宮廷讃歌の方法―和歌と天皇制序説―」（『日本文学』三十九巻一号、一九九〇年一月）

（9）以下、本稿における『文選』の引用は、梁、昭明太子撰、唐、李善注『文選 附考異』（一九九八年十二月、藝文印書館）による。また、訓読等については、小尾郊一氏、花房英樹氏著『文選』（全釈漢文大系26～32、一九七四年六月～一九七六年一月、集英社）を参照した。

（10）以下、本稿における鮑照詩の引用は、鮑照撰、謝朓撰、蕭統撰、江淹撰『鮑氏集　謝宣城詩集　梁昭明太子文集　江文通文集』（四部叢刊初編集部、一九六五年、台湾商務印書館）による。但、一部、私的に改めたところがある。

（11）藤原佐世撰『日本國見在書目録』は八九一年頃の成立とされ、これにより、平安期における漢籍の日本伝来が確認できる。西澤泰義氏（発行）『日本國見在書目録』（一九九六年一月、名著刊行会）、参照。

（12）芳賀紀雄氏「萬葉集と中國文学」（『萬葉集における中國文学の受容』、二〇〇三年十月、塙書房）

（13）覆舟山の場所について、南朝宋、鮑照著、錢仲聯増補集説校『鮑参軍集注』（一九八〇年十一月、上海古籍出版社）に「寰宇記『覆舟山在二建康城北五里一』」とある。

（14）以下、本稿における『藝文類聚』の引用は、唐、歐陽詢撰『宋本藝文類聚』（二〇一三年十二月、上海古籍出版社）による。

（15）『文選』巻第二十二、游覧の部に、晉、謝混「游二西池一」、南朝宋、謝靈運「游二南亭一」、齊、謝朓「游二東田一」等、題する詩がある。「遊」と「游」とは通用するとされ、これらの「游」は風光明媚な土地に出かけたり巡ったりして楽しむ場合に用いられている。

（16）以下、本稿における漢籍史書（『史記』、『漢書』、『後漢書』、『晉書』、『宋書』、『南齊書』、『隋書』）の引用は、二十四史（一九九七年十一月、中華書局）による。

（17）但、南朝宋の時代に北郊の行われた記録はなく、南郊のみが実施される。金子修一氏『中国古代皇帝祭祀の研究』（二〇〇六年四月、岩波書店）、参照。

（18）以下、本稿における『日本書紀』の引用は、小島憲之氏、直木孝次郎氏、西宮一民氏、蔵中進氏、毛利正守氏校注・訳『日本書紀』①～③（新編日本古典文学全集2～4、一九九四年四月～一九九八年六月、小学館）による。但、一部、私的に改めたところがある。

（19）「開レ雲」は、『文選』に「側聽二風薄一レ木、遙睇二月開一レ雲」（巻第二十六、南朝宋、顔延之「夏夜呈二從兄散騎車長沙一一首」）と、顔延之の詩に類似表現がある。「山祇躡二嶠路一　水若警二滄流一」の詩の作者でもある顔延之は、鮑照と同じ南朝宋の人で鮑照より少し前に活躍した。その為か、二人の作品には類似表現が多々あるように思われる。一方、『後漢書』に「揚二朝恩一示二以和睦一、曠若二開レ雲見一レ日」（巻七十四上、袁紹劉表列傳第六十四上、袁紹）と、「開レ雲」は用いられる。この用例は明らかなることを「開レ雲」に譬えており、その対象が「朝恩」であることに示唆するものがある。鮑照詩においても「開レ雲」の主体は景ならば太陽であろうが、それが譬喩するものとして天子が想定される。「中縣」は、『漢書』に「中縣之民」、その顔師古注に「如淳曰、中縣之民、中國縣民也」（巻一下、高帝紀第一下）とあり、天子の統治する地を言うであろう。これらは、景を詠みつつ、天子を讃える表現を含蓄すると想定される。

（20）以下、本稿における『説文解字』の引用は、後漢、許慎撰、清、段玉裁注『説文解字注』（一九八一年十月、上海古籍出版社）による。

（21）「丹居」の「丹」は朱い色、「居」は住まいの意。『文選』に「流雲藹二青闕一　皓月鑒二丹宮一」（巻第二十六、南朝宋、顔延之「直二東宮一答二鄭尚書一一首」）と、やはり顔延之の詩に類似表現がある。「丹居」、「丹宮」は共に宮殿を言おう。

（22）本稿における『楽府詩集』の引用は、宋、郭茂倩著『楽府詩集』（中國古典文學基本叢書、一九七九年十一月、中華書局）による。

（23）以下、本稿における経書類（『毛詩』、『毛詩正義』、『禮記』、『禮記正義』、『周禮』、『周禮注疏』、『春秋左傳正義』等）の引用は、十三経注疏整理本（二〇〇〇年十二月、北京大學出版社）による。

（24）「涼殿」の用例について、他に唐代のものとなるが、『法苑珠林』に「時淨飯王為二於太子一造二三時殿一、一者暖殿以擬二隆冬一、第二涼殿以擬二夏暑一、第三中殿用擬二春秋一。」（巻第十、千佛篇第五之三、納妃部第九、求婚部第三）とあり、これも夏の用例と思われる。（『法苑珠林』の引用は、『大正新修大蔵経』、一九二八年一月、大正一切經刊行會による）。

（25）「焱」は『説文解字』に「焱、火華也」（十篇下、焱部）とある。「流」は『文選』に「窺二東山之府一、則壞寶溢レ目、觀二海陵之倉一、則紅粟流衍。」（巻第五、晉、左思「呉都賦」）等、満ち溢れ流れ出るような場面に用いられる例がある。「流宴」も満ち溢れ流れるような盛んな宴会の意であろう。

（26）「含靈」は、『文選』に「涉レ器千名、含レ靈萬族。」（巻第五十九、梁、王巾「頭陁寺碑文一首」）とあり、「藏物」は、『禮記正義』に「府者、藏物之處也。既法天地立レ官、天地應レ生二萬物一、故為二萬物一立レ府也」（巻第四、曲禮下第二）とある。「含靈」も「藏物」も天地にあるすべての生物を指そう。

（27）「神都」は、後の時代であるが、『九家集注杜詩』に「神都憶二帝車一」、その郭知達注に「神都則天子所レ居乃神明之都也」（巻二十九、「贈二李八秘書一別三十韻」）とあり、天子の居る都を指す（『九家集注杜詩』の引用は、宋、郭知達編『九家集注杜詩』、一九〇〇年代、商務印書館による）。「華甸」は、『宋書』に「京口肇二祥自古一、著二符近代一、衿二帶江山一、表二裏華甸一」（巻五、本紀第五、文帝）とある。「甸」については、『説文解字』に「甸、天子五百里内田」（十三篇下、田部）とあり、「華甸」も天子の領有する土地、すなわち都を指すであろう。

（28）「醴」は『説文解字』に「醴、酒一宿孰也」（十四篇下、酉部）とあり、一晩で醸造した酒のことである。

（29）同内容の詩が『晋書』の「碣石篇」（巻二十三、志十三、楽下）にもあり、『南齊書』は「碣石辞…（中略）…魏武帝辭、晉以為二碣石舞一、歌詩四章」（巻十一、志第三、楽）とする。但、『晋書』の成立は遅く唐代（六四八年）であり、『宋書』からの引用も有る。従って、ここでは『宋書』の用例を挙げておきたい。

（30）『説文解字』に「景、日光也」（七篇上、日部）とある。

（31）「皇州」は、『文選』に収載される鮑照の詩「結客少年場行」の中に、「升レ高臨二四關一　表裏望二皇州一」（巻第二十八、南朝宋、鮑照「樂

府八首」第三首）とあり、帝都のこと。「麗」は、同じく『文選』に「遠巖映二蘭薄一　白日麗二江皐一」（巻第二十二、南朝宋、謝靈運「從二游京口北固一應詔一首」）とあり、美しい「白日」（太陽）の様子を表している。

(32)「愛景」について、丁福林氏、叢玲玲氏校注『鮑照集校注』下冊（中國古典文學基本叢書、二〇一二年四月、中華書局）が、「愛景、猶曖景。謝靈運《佛影銘》、「観レ遠表相、就レ近暖景、匪レ質匪レ空、莫レ測莫レ領。」《文選》巻五八、王儉《褚淵碑文》、「曖有二餘暉一、遙然留レ想。」李善注、「曖、溫貌。《莊子》曰、『曖然似レ春、遙然流レ想、所レ慮者深矣。』」とする。

(33)『漢書』に「不三敢絶二馳道一」（巻十、成帝紀第十）、その顔師古注に「應劭曰、馳道天子所レ行道也」とある。『説文解字』に「路、道也」（二篇下、足部）とあり、「馳道」と「馳路」は同意である。

(34)「佇」は『毛詩』國風、邶、「燕燕」の詩に「瞻望弗レ及　佇立以泣（毛傳）佇立、久立也」とある。

(35)「神都」が天子の都ならば、ここでの「神居」は天子の住まいと捉えて良かろう。「崇盛」は『蔡中郎集』に「雖二則崇盛一　猶レ匪二寧息一」（巻六、「濟北相崔君夫人誄」）とあり（『蔡中郎集』の引用は、漢、蔡邕撰『蔡中郎集』、一九〇〇年代、中華書局による）、「嵒嶮」は、『文選』に「巖險周固、衿帶易レ守」（巻第二、後漢、張衡「西京賦」）とある。

(36)「禮俗」は『周禮』に「六曰、禮俗以馭二其民一」その鄭玄注に「禮俗、昏姻喪紀、舊所レ行也」（巻第二）とある。昔より（いわゆる冠婚葬祭などで）人々の集まる所の意。「徳聲」は、『文選』に「不レ能レ歌二德聲一」（巻第二十四、魏、曹植「又贈二丁儀王粲一一首」）とあり、その李善注が「德聲、謂二太祖令德之聲一也」と、曹操の徳とする。それ故に、鮑照第二詩でも天子の徳と解したい。

(37)「昌」は『文選』に「六合殷昌（李善注）…昌、熾也」（巻第三、後漢、張衡「東京賦」）、『説文解字』に「熾、盛也」（十篇上、火部）とあり、「民謳」は『毛詩正義』に「太平之時、人民和樂謳歌」（巻第十九）とある。鮑照詩にも天子の徳によって太平が訪れ人々がその天子を讃えて歌う様が詠まれていると捉えられる。『説文解字』、「謳、齊歌也」（三篇上、言部）。

(38) 第一長歌「八隅之知」と第二長歌「安見知之」の文字表現の違いについては、「八隅之知」は「天下の隅々まで八方をお治めになる」意、「安見知之」は「安らかに国をお治めになる」意とされる（小島憲之氏、木下正俊氏、東野治之氏校注・訳『萬葉集』①、四十六、四十七頁、頭注、新編日本古典文学全集6、一九九四年九月、小学館など）。

(39) 太田豊明氏「柿本人麻呂「吉野讃歌」の主題と構造」（『国文学研究』一一四集、一九九四年十月）

(40)（39）に同じ。

(41) 日本の文献において「宮柱」は「太しく」云々と共に「統治する」という場面に現れる。

○『古事記』

於二底津石根一宮柱布刀斯理、…（中略）…於二高天原一氷椽多迦斯理、…（中略）…而居。是奴也。故、持二其大刀・弓一、…（中

略）…始作レ國也。　（上巻、大国主神）

於二底津石根一宮柱布斗斯理、…（中略）…於二高天原一氷木多迦斯理、…（中略）…而、治賜者、僕者於二百不レ足八十坰手一隱而侍。　（上巻、葦原中国の平定）

於二底津石根一宮柱布刀斯理、於二高天原一氷椽多迦斯理而坐也。　（上巻、邇邇芸命）

○『日本書紀』

天皇即二帝位於橿原宮一。…（中略）…於二畝傍之橿原一也、太二立宮柱於底磐之根一、峻三峙搏二風於高天之原一、而始馭天下之天皇、號曰二神日本磐余彦火々出見天皇一焉。　（巻第三、神武天皇、元年正月）

○『萬葉集』

由縁母無　真弓乃岡尓　宮柱　太布座　御在香乎　高知座而…　（巻二－一六七）

山代乃　鹿脊山際尓　宮柱　太敷奉　高知為　布當乃宮者…　（巻六－一〇五〇）

○祝詞

皇神能敷坐、下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知弖、　（「祈年祭」）

下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知座須、伊射那伎能日眞名子、　（「出雲國造神賀詞」）

※『古事記』及び「祝詞」の引用は、倉野憲司氏、武田祐吉氏校注『古事記　祝詞』（一九五八年六月、岩波書店）による。

（42）身崎壽氏「吉野讃歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』第二巻、一九九九年九月、和泉書院）

（43）その中の「山神」（「吉野讃歌」第二長歌）は、契沖等の挙げる顔延年詩には蹕（先払い）をするものと描かれ、鮑照第二詩においても清蹕（先払い）が詠まれるという、間接的な共通性が見出される。

（44）（42）に同じ。

（45）当時、鮑照詩が新帝即位に関わって詠まれものと（日本において）知り得たか、疑問もあろう。しかし、偶然の一致とは思えず、何らかの情報があったか、或いは、新帝即位の折の行幸には天子を賞讃する詩を詠む慣例があり、それが日本にも齎されていたか、推測の域は出ないが、そのように考えたい。

［付記］

・本稿は、第三十八回（二〇一九年度）和漢比較文学会全国大会（於上智大学）における口頭発表に加筆・修正したものです。ご指導いただいた先生方に深く感謝いたします。

・本稿は、令和元年度植田安也子学術振興基金の助成を受けて行った研究成果の一部です。

（二〇二〇年九月二十八日受理）

（うちだ　ふみ・京都府立大学大学院学術研究員）